2023年度

一般入試＜前期＞

2023年1月31日実施分

問題と解答

国　語

国　語

Ⅰ　次の文章を読んで、後の問い（問1～10）に答えなさい。

人間は赤からスミレ色までの色を見ている。そして、それらの色が均等に反射されているものを「白い」と認知している。ⓘ、多くの昆虫は赤が見えず、黄色から紫外線までを光として見ている。そこで、彼らにとって白とは黄色から紫外線までを含んだ光が均等に反射されている場合の色なのである。するとわれわれ人間が言っている白という色と、昆虫が感じている白という色は違う色であるということになる。ある野原に育つ緑の植物、そしてそこに咲く花は空からの太陽光を反射している。紫外線を反射しているものもたくさんある。しかし、その部分の色を人間は見ることができない。昆虫はそれを見ることができる。ⓧ　　ということになる。このように異なる知覚の枠に基づいて構築された世界は、人間と昆虫とでは完全に違っているわけだ。

このような議論は昔からさかんにされてきている。そして、最近では人間がめがねをかけて、昆虫になってみようという試みもいくつかの博物館でなされたことがある。しかし、これは無理なことである。本来、人間の目は紫外線を感知できないようにできているからである。

それはなぜかというと、紫外線は非常に化学的な作用が強い。夏、紫外線が強いすなハマとかあるいは冬、強い光のさす雪の上では、大量の紫外線が反射されたり、降ってきたりしている。それを人間の肌が受けると、化学的な作用をおこし、日焼けして色が黒くなる。しかし、人間は紫外線を光としては感知できないので、知らぬ間にひどい日焼けをする。まぶしいと思うのは光が強いからであって、紫外線のせいではない。

そのような紫外線の悪い化学的作用を避けるために、人間の目のレンズ（イすいショウたい）は紫外線を通さないようにできている。だから人間はいかに紫外線が降りそそいでいても、それを感知できないのである。昆虫の目は多少構造が違うので、あまり波長の短くない紫外線は見えるようになっている。人間にはその部分が見えない。レンズがウきゅうシュウしてしまうから、紫外線は目の感覚細胞には届かないのである。したがって、どんなめがねをかけようとも、人間は紫外線を感知することができない。

ましてや昆虫は紫外線の色を、他の黄色とか、青とかと違う、紫外色というひとつの独立した色として認知しているのであるが、人間にはその色がどんな色なのか、まったくわからない。われわれはさまざまな色を見ているが、その色の他に、紫外色という色があるのかどうか、それもわからない。これは人間がエエイえんに実感できない色である。【　Ⅰ　】

そのような知覚的な枠組みの違いが存在しているので、人間が構築している世界と、昆虫たちが構築している世界とは、少なくとも色においては完全に違っている。われわれはそれを理屈でいろいろと考えてみることはできる。しかし、本当にどんな色か感じることはできない。

理屈として考えてみると、人間が感知できる光のいちばん長い波長は赤である。いちばん短い波長はスミレ色である。その二つが混ざった色というのは、ようするに虹の七色が赤からスミレ色に移るところで赤とスミレ色がダブった紫（パープル）である。したがって昆虫が感知できるいちばん長い波長である黄色と、いちばん短い波長である紫外色が混ざった色というのは、おそらく人間の紫に近いものであろうということは［ⅱ］にはわかる。しかし、実際にはどんな色なのか、われわれにはまったくわからない。【　Ⅱ　】

モンシロチョウのオスは、モンシロチョウのメスの翅（はね）の裏の黄色と紫外色の混ざった色を、メスである信号として認知して、世界を構築している。その色がどのようなものか人間にはわからないが、今述べた［ⅱ］なオスイろんに立つと、それは人間の紫ⓑに近い色であろうということになる。けれど赤とスミレ色の混ざった人間の紫と、黄色と紫外色の混ざった昆虫の紫とはおのず

から違うものであろう。そこでわれわれは、人間の紫をヒューマン・パープル（human purple）、昆虫の紫をインセクト・パープル（insect purple）と呼ぶことにしている。【 Ⅲ 】

けれど、すべての昆虫が赤が見えないわけではない。［　　ⓨ　　］。赤い花が大好きで、蜜を吸うときには、好んで赤い花を訪れる。すると、同じチョウの仲間でありながら、アゲハチョウは紫外線も見え、かつ赤も見えているから、見えている光の幅がモンシロチョウよりも広いことになる。

そうすると、Ⓑアゲハチョウにとっては、赤から近紫外までを均等に反射しているものが白であるはずである。モンシロチョウにとっては、赤が見えないから、赤があろうが、なかろうが、それは関係ない。黄色から近紫外までを均等に反射しているものがモンシロチョウにとっての白である。アゲハチョウを昆虫の中で例外とすれば、昆虫にとって白とは、前に述べたように黄色から近紫外までを反射している色であり、人間にとっての白は、赤からスミレ色までを反射している色であって、紫外線が反射されているかどうかは関係ない。【 Ⅳ 】

そこで同じ白でありながら、まったく違う白であることになる。人間にとっての白をヒューマン・ホワイトといい、昆虫にとっての白をインセクト・ホワイトというが、ヒューマン・ホワイトとインセクト・ホワイトは、同じホワイトでも違うのである。

われわれの見ている野原は、われわれにとっては緑であるが、昆虫にとってはどんな色なのかはわれわれにはわからない。つまり、緑の環境といったときに、昆虫にとっては緑の環境かどうかわからないのである。同じ物がまったく違う世界として見えていることになる。【 Ⅴ 】

このことはとても重要なことなのではなかろうか。そして、Ⓒ同じ昆虫でもアゲハチョウの見ている世界と、モンシロチョウの見ている世界はもはや同じではない。このように考えてみると、ひとつの環境というものは存在しないことになる。それぞれの動物の主体が構築している世界があるだけであって、この環(注)世界は動物の種によってさまざまに異なっているのである。

（日高敏隆『動物と人間の世界認識』より）

（注）環世界……動物の種ごとに世界があるという考え方。ドイツの生物学者・ユクスキュルが提唱した概念。

問1　太線部㋐～㋔のカタカナで表記された部分に使用する漢字を、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

㋐ すなハマ　①

1 兵　2 沿　3 沖　4 浜　5 浦

㋑ すいショウたい　②

1 小　2 賞　3 晶　4 奨　5 称

㋒ きゅうシュウ　③

1 集　2 収　3 習　4 衆　5 周

㋓ エイえん　④

1 永　2 栄　3 英　4 泳　5 映

㋔ スイろん　⑤

1 垂　2 帥　3 睡　4 遂　5 推

問2　二重傍線部ⓐ・ⓑはそれぞれ本文中でどのような意味で用いられているか。最も適当なものを、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

ⓐ　構築された　⑥

1　計画された
2　作り上げられた
3　用意された
4　感じ取られた
5　手を加えられた

ⓑ　おのずから　⑦

1　それぞれ
2　多少は
3　もしかすると
4　ますます
5　自然のなりゆきとして

問3　空欄ⅰ・ⅱに入れるのに最も適当なものを、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。（ⅱは本文中に二箇所同じものが入る。）

空欄ⅰ　⑧

1　だから
2　なぜなら
3　むろん
4　しかし
5　あるいは

空欄ⅱ　⑨

1　経験的
2　理論的
3　直感的
4　個人的
5　現実的

問4　空欄ⓧに入れるのに最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。⑩

1　すなわち、この世界には人間が存在そのものを認識することができない動植物がたくさんある

2　もちろん、人間と昆虫の知覚が違うからといって、緑の植物や、赤や黄色の花の色が変わるわけではない

3　したがって、人間が美しいと感じている植物を、昆虫も同じように美しいと感じているとは限らない

4　ただし、これは特殊な事例であって、人間と昆虫がいつも違った世界を見ているわけではない

5　そうすると、野原の緑も、そこに咲く花の色も、人間と昆虫とではまったく違った色である

問5　波線部Ⓐ「しかし、これは無理なことである」とあるが、筆者がこのように言っているのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。⑪

1　紫外線は人間にとって有害な光であって、人間の目はそうした紫外線を通さない構造になっているため目の感覚細胞に届かないうえ、人間は紫外線がどのような色なのか認知することもできないから。

2　紫外線は人間にとって有害な光であって、人間の目の感覚細胞は紫外線が届いてもそれを感知できない構造になっているうえ、紫外線は波長の短い光であるため、人間はその色を認知することもできないから。

3　紫外線は人間にとって有害な光であって、人間の目は紫外線のような有害な光を感知できない構造になっているうえ、紫外線は他の光のように独自の色を持たないため、人間はそれを認知することもできないから。

4　紫外線は人間にとって有害な光であって、人間の目は紫外線を感知できない構造になっているうえ、紫外線は人間が生きている「世界」には存在しない光であるため、その存在を認知することもできないから。

5　紫外線は人間だけでなく昆虫以外の他の生物にとっても有害な光であって、人間やそうした生物の目は紫外線をほとんど通さない構造になっているうえ、紫外線のような波長の短い光の色を認知することもできないから。

問6　空欄ⓨに入れるのに最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。⑫

1　ほとんどすべての昆虫が紫外線が見えることは確かであり、そして赤が見えることも確かであるが、アゲハチョウも赤が見える

2　ほとんどすべての昆虫が紫外線が見えないことは確かであり、そして赤が見えないことも確かであるが、アゲハチョウは赤が見える

3　ほとんどすべての昆虫が紫外線が見えることは確かであり、そして赤が見えないことも確かであるが、アゲハチョウは赤が見える

4　ほとんどすべての昆虫が紫外線が見えないことは確かであり、そして赤が見えないことも確かであるが、アゲハチョウも赤が見えない

5　ほとんどすべての昆虫が紫外線が見えることは確かであり、そして赤が見えるかどうかはわからないが、アゲハチョウは赤が見える

問7　波線部Ⓑ「アゲハチョウにとっては、赤から近紫外までを均等に反射しているものが白であるはずである」とあるが、アゲハチョウにとっての白とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。⑬

1　アゲハチョウにとっての「白」という色は人間にとっての白と同じものであるが、一般的な昆虫にとっての白とは違うものである。

2　アゲハチョウにとっての「白」という色は人間にとっての白とは違うものであるが、一般的な昆虫にとっての白とは同じものである。

3　アゲハチョウにとっての「白」という色は人間にとっての白とは違うものであるが、一般的な昆虫にとっての白とも違うものである。

4　アゲハチョウにとっての「白」という色は人間や一般的な昆虫にとっての白と同じものであるが、モンシロチョウにとっての白とは違うものである。

5　アゲハチョウにとっての「白」という色は人間や一般的な昆虫にとっての白とは違うものであるが、モンシロチョウにとっての白とは同じものである。

問8　波線部Ⓒ「同じ昆虫でもアゲハチョウの見ている世界と、モンシロチョウの見ている世界はもはや同じではない」とあるが、筆者がモンシロチョウとアゲハチョウで「見ている世界」は同じではないと言っているのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。⑭

1　モンシロチョウとアゲハチョウはチョウという同じ仲間の昆虫であるにもかかわらず、それぞれが生息している場所が違っているから。

2　モンシロチョウとアゲハチョウでは目の構造が違っているため、それぞれが一度に見ることのできる「世界」の広さが違っているから。

3　モンシロチョウとアゲハチョウは「野原」という同じ「緑の環境」に生息しているが、それぞれの環境を構成しているものが違っているから。

4　モンシロチョウとアゲハチョウでは色の好みが違っているため、同じ野原でも、それぞれが自分の好きな色の花が多い場所で生息しているから。

5　モンシロチョウとアゲハチョウでは、たとえ同じ場所に生息していたとしても、それぞれが見ることのできる光の幅が違っているから。

問9　本文には次の一文が抜けている。その入る位置として最も適当なものを、後の1～5のうちから一つ選びなさい。 ⑮

多くの昆虫の場合は赤が反射されているかどうかは関係ない。

1【Ⅰ】
2【Ⅱ】
3【Ⅲ】
4【Ⅳ】
5【Ⅴ】

問10　本文の内容に最もよく合致するものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。⑯

1　人間と昆虫は草原のようなひとつの環境を違った「世界」として見ているが、こうした違いはひとつの環境をどのように見ているかというだけのことであって、その環境の中での生き方に大きな違いがあるといったことではない。

2　人間や昆虫やその他の生物はそれぞれ違った独自の「世界」を構築しているが、それぞれの世界は色だけでなくその世界を構成するすべてのものが違っていて、それぞれがそれぞれの世界の中で互いに関わり合うことなく生きている。

3　人間と昆虫では同じ野原であってもその見え方がまったく違うなどといったように、色のような知覚的な枠組みからみると、環境というものはひとつではなく、それぞれの生物ごとにさまざまな環境の「世界」があると考えることができる。

4　人間や昆虫はそれぞれ独自の「世界」を構築して生きているが、地球上に存在するさまざまな生物のなかでそうした世界を持っているのは一部の生物だけであって、ほとんどの生物はそうした世界を持たず同じ世界の中で生きている。

5　人間や昆虫は知覚的な枠組みの違いによって独自の「世界」を構築していると考えられるが、そのような世界が存在するということは理屈として考えられるということであって、そうしたものが本当に存在しているかどうかはわからない。

Ⅱ　次の文章を読んで、後の問い（問1～10）に答えなさい。

私たちの誰もが完璧な記憶力をもつことにあこがれをいだきます。私が記憶について研究をしていると人に話しますと、最初に聞かれるのは、きまって記憶力をよくするための秘訣（ひけつ）です。実のところ、私が人間の記憶に興味をもつようになったきっかけも、自分の記憶力をよくしたいという気持ちからでした。でも、本当に完璧な記憶力を身につけることは、それほど素晴らしいことなのでしょうか。

南米アルゼンチンに、ア［　　］ゲンそう的な作風で有名なホルヘ・ルイス・ボルヘスという作家がいました。Ⓐそんな彼の不思議な作品の一つに、完璧な記憶力をもつ主人公を描いた『記憶の人、フネス』という作品があります。

主人公フネスは、一度体験したことや見たもの聞いたものなど何でも、その細部にイ［　　］タるまで完璧に覚えることができました。そのおかげで、彼は「世界が始まって以来、あらゆる人間が持ったものをはるかに超える記憶」をもっています。

しかし、残念ながら、それらは互いに何の関連性もない「ごみ捨て場」のような記憶ばかりでした。あるとき、フネスは、それらを要約して分類することを決意しましたが、すぐに思いとどまりました。［ⅰ］、あまりにも多すぎるために、その作業にはウ［　　］トほうもない時間が必要で、とうてい自分の生きている間には終わらないと思えたからです。【　Ⅰ　】

この作品で、ボルヘスは完璧な記憶をどれほどもっていても、それらが整理されていなければ、単なるⓐ無用の長物にすぎないということを訴えたかったのだと、一般には解釈されています。もちろん、このような解釈も間違いではないでしょう。

しかし、私には、ことさら努力しなくとも記憶を要約できるという忘却の力の重要性を彼が主張したかったように思われます。その理由は、Ⓑ一九世紀から二〇世紀のアメリカで活躍した心理学者ウィリアム・ジェームズの記憶に関する思想から、ボルヘスがこの作品の着想を得たと思われるからです。実は、ボルヘスの父親は外国語教員養成所で、心理学を教えていました。そのため、ジェームズだけでなく、デイヴィッド・ヒュームやジョージ・バークレイといったヨーロッパの哲学者の思想にも詳しかっ

たそうです。おそらく、その父親を通してボルヘス自身もジェームズの思想に触れたのではないかと思われます。【 Ⅱ 】

ではジェームズの記憶に関する思想とは、いったいどのようなものだったのでしょうか。ジェームズは、今なお心理学を学ぶ者の必読書である『心理学原理』という書物の中で、完璧な記憶をもった場合のマイナス面について、次のように述べています。

もし私たちがあらゆることを忘れないとすれば、ほとんどの場合、何も覚えていないのと同様に困ったことになる。ある一定の時間を要した出来事を思い出すためには、もとの出来事と同じだけの時間が必要になり、新しいことを考えることができなくなってしまう。

たとえば、「先週のパーティはどうだった?」と聞かれた場合を考えてみましょう。もしフネスのように、先週のパーティの記憶を完璧に覚えている場合、パーティの最初から時間を追ってすべてを思い出すまで、パーティの経過時間と同じだけの時間がかかってしまいます。ちょうど、パーティを丸ごと撮影した映像を頭から再生することと同じことです。こうした再生がすべて終わって、ようやく「つまらなかった」などと答えることになるのです。【 Ⅲ 】

これに対して、ⓧ[　　]。そこで、覚えている一部分だけをもとにして、即座に「つまらなかった」などと答えることができます。このように、私たちはフネスとは違い、ⓘⓘ[　　]を忘れてしまうことで、もとの出来事を労ⓑせずに要約できるわけです。そして、この自然にそなわった忘却力のおかげで、私たちは次々と新しいことがらを覚えたり、自分の考えを先に進めていくことができるのです。

忘却力による恩恵はこれだけにとどまりません。私たちは生きていく中で、辛(つら)い出来事に出くわすことが多々あるはずです。人に受けたひどい仕打ち、最愛の人との別れ、などがその例でしょう。しかし、ありがたいことに、どれほど辛い記憶であっても、時間の経過にともなって、次第に忘れられ、その辛さが軽減していくものです。フランスの作家オル・ド・バルザックの「多

くの忘却なくしては人生を暮らしていけない」ということばを引き合いに出すまでもなく、［　　ⓨ　　］、私たちは人生を前に進めることができないのです。

私たちは時間の流れの中で生きています。つまり、今現在という時間は、次の瞬間には過去になってしまい、つい一瞬前まで未来であった時間は現在となります。それゆえ、私たちは現在という時間をセイ(エ)いっぱい生きなければならないのですが、同時に、私たちは未来へ向かって生き続けていく存在でもあります。人生の時間の経過にともなって、私たちは、新たな人びとと絆(きずな)を結び、新たな出来事に出くわし、新しいものごとを知り、自分自身を見つめ直しもします。【　Ⅳ　】

このように、生きている限り、変わり続けていく存在である私たちが、仮にフネスのように過去の記憶をどれほど多くもったとしても、そこにはいったいどのような意味があるのでしょうか。幼い頃に遊んだオモチャがそのままの形で目の前に残っていたとしても、大人になった私たちはナツかしさ(オ)こそ感じるとしても、そのオモチャで遊ぶことはないはずです。だとすれば、過去のままの姿の記憶がどれほどあったとしても、(ⓒ)それは「ごみ捨て場」のような記憶にすぎません。私たちは自然にそなわった忘却力に感謝すべきであって、フネスのような完璧な記憶力を何一つうらやむ必要はないのです。【　Ⅴ　】

（高橋雅延『記憶力の正体』より）

問1　太線部㋐～㋔のカタカナで表記された部分に使用する漢字を、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

㋐ ゲンそう　⑰

1 現　2 玄　3 厳　4 幻　5 弦

㋑ イタる　⑱

1 射　2 諮　3 至　4 図　5 痛

㋒ トほう　⑲

1 途　2 戸　3 徒　4 塗　5 都

㋓ セイいっぱい　⑳

1 清　2 正　3 聖　4 盛　5 精

㋔ ナツかしい　㉑

1 悔　2 壊　3 快　4 怪　5 懐

問2　二重傍線部ⓐ・ⓑはそれぞれ本文中でどのような意味で用いられているか。最も適当なものを、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

ⓐ　無用の長物　㉒

1　たいして役に立たないもの
2　あっても役に立たず邪魔なもの
3　役に立つかどうかわからないもの
4　あってもなくてもよいもの
5　大きな問題を引き起こすもの

ⓑ　労せずに　㉓

1　簡単に
2　誰でも
3　わかりやすく
4　自分だけの力で
5　知らず知らずのうちに

問3　空欄ⓘ・ⓘⓘに入れるのに最も適当なものを、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

空欄ⓘ　㉔

1　ただし
2　むしろ
3　けれども
4　なぜなら
5　しかも

空欄ⓘⓘ　㉕

1　一言一句
2　喜怒哀楽
3　枝葉末節
4　森羅万象
5　大義名分

問4　波線部Ⓐ「そんな彼の不思議な作品の一つに、完璧な記憶力をもつ主人公を描いた『記憶の人、フネス』という作品があります」とあるが、ボルヘスはこの作品でどのようなことを主張したかったのだと筆者は考えているか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。㉖

1　人間にはいったん記憶したことを時間の経過とともに忘れてしまう「忘却力」という力があるため、どんなに努力をしても完璧な記憶をもつことはできないということ。

2　人間には記憶したことを要約することができる「忘却力」という力があるが、この力は誰もがもっているものではなく、忘却力を身につけるにはそれなりの努力が必要だということ。

3　人間の記憶は整理されていなければ意味がないなどといったことよりも、それほど努力をしなくても記憶を要約することのできる「忘却力」という力が重要だということ。

4　人間には無意識のうちに記憶を要約することのできる「忘却力」という力がそなわっているので、記憶を整理するために努力をするなどといったことは全く無駄なことだということ。

5　人間は誰でも記憶したことを要約して保存するときに働く「忘却力」という力をもっているが、その使い方を知っている人はほとんどいないため、人びとに忘却力の正しい使い方を理解させなければならないということ。

問5　波線部Ⓑ「一九世紀から二〇世紀のアメリカで活躍した心理学者ウィリアム・ジェームズの記憶に関する思想」とあるが、ジェームズは「記憶」についてどのような考え方をもっていたのか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。㉗

1　あらゆることを忘れない完璧な記憶をもっていると過去の出来事を思い出すのに一定の時間がかかったり新しいことを考えられなくなったりするため、そうした記憶をもつことは絶対に避けなければならない。

2　記憶力がないことは問題であるが、反対に完璧な記憶をもつことは過去の出来事をすぐに思い出せなかったり新しいことを考えられなくなったりするなどといった問題が生じるため決して望ましいことではない。

3　記憶力がよいのは悪いことではなく完璧な記憶をもつことは理想的だが、記憶力が完璧だと過去の出来事を思い出したり新しいことを考えたりするのに長い時間がかかるといったマイナス面があることを理解しておかなければならない。

4　完璧な記憶をもつと過去の出来事を思い出すのに長い時間がかかったり新しいことを考えられなくなったりするなどといった問題が生じるが、完璧な記憶をもつことは難しいためそうした問題を特に気にする必要はない。

5　完璧な記憶をもっていると過去の出来事を思い出すのに長い時間がかかったり新しいことを考えられなくなったりするが、そうしたことは記憶が完璧でなくても起こることであるため、記憶力そのものが人間にとって不必要なものである。

問6 空欄ⓧに入れるのに最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。 ㉘

1 私たちの場合は、パーティの中で印象に残っている出来事以外の細部は忘れているのがふつうです
2 私たちの場合は、すっかり忘れていたと思っていたことでも、聞かれれば思い出すことができるのです
3 私たちの場合は、自分が特に興味をもった出来事以外は、もとから何も覚えていないのです
4 私たちの場合は、過去の出来事を記憶するのではなく、メモや日記に残して忘れないようにすることがあります
5 私たちの場合は、パーティのような非日常的な出来事は、時間がたっても案外よく覚えているものです

問7 空欄ⓨに入れるのに最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。 ㉙

1 忘却力をしっかり働かせて過去の記憶をすべて忘れることができないと
2 過去の楽しかった出来事と辛い出来事を整理して記憶しておかないと
3 毎日を漫然と過ごしているだけで、過去を忘れる努力を怠っていると
4 過去の出来事を忘れようとすればするほどいろいろなことを思い出し
5 このような忘却力がなければ、いつまでも過去の辛い記憶にとらわれ

問8　波線部Ⓒ「それは『ごみ捨て場』のような記憶にすぎません」とあるが、「『ごみ捨て場』のような記憶」とはどのような記憶のことか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。㉚

1　幼い子どもの頃は役に立っていたが、大人にとっては邪魔になるだけで何の役にも立たない記憶
2　自分が実際に経験したことであるが、長い時間がたつうちに内容がぼんやりと曖昧になってしまった記憶
3　早く忘れてしまいたいと思っているのにいつまでたっても忘れることができない嫌な記憶
4　過去のさまざまな出来事についてただたくさん蓄積されているだけで何の整理もされていない記憶
5　日常生活ではめったに使うことがないため、必要なときにすぐに思い出すことができない記憶

問9　本文には次の一文が抜けている。その入る位置として最も適当なものを、後の1～5のうちから一つ選びなさい。㉛

こうした時間の経過にともなう変化のすべてが私たちを変えていきます。

1【Ⅰ】　2【Ⅱ】　3【Ⅲ】　4【Ⅳ】　5【Ⅴ】

問10　本文の内容に最もよく合致するものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。 ㉜

1　人間の記憶というものはどれも同じではなく、生きていく中で役に立つものとそうではないものがあるため、過去の出来事を完璧な記憶としてすべて忘れないようにするのではなく、未来に向かって生きていくうえで必要のない記憶はすぐに忘れるようにすることが大切である。

2　忘れるということは過去の出来事が頭の中から完全に失われてしまうということではなく、時間はかかるものの何らかのきっかけがあれば思い出すことができるものであるため、私たちは完璧な記憶を無理に身につけようとするのではなく、自然のままに任せておくことが望ましい。

3　世の中には完璧な記憶力を身につけることを望む人は多いが、完璧な記憶力を身につけることにはさまざまな問題がある一方、忘れるということには私たちが生きていくうえでさまざまな恩恵があるため、完璧な記憶力を身につけることを望むのは意味のないことである。

4　フネスのような完璧な記憶力を身につけるのは誰にでもできるような簡単なことではないが、たとえそうした記憶力を身につけることができたとしてもさまざまな問題が生じるだけで何の恩恵もないため、完璧な記憶力を身につけようとして努力するのは全く無駄なことである。

5　私たちは誰もが完璧な記憶力を身につけたいと思っているが、忘却力とは違って完璧な記憶力を身につけることにはさまざまな恩恵がある一方、過去にとらわれすぎて未来に向かって生きることができなくなってしまうため、完璧な記憶力を身につけるのは諦めてしまったほうがよい。

〔問題終了〕

2023年度　一般入試＜前期＞解答　1月31日実施分

国語	
解答番号	解答
①	4
②	3
③	2
④	1
⑤	5
⑥	2
⑦	5
⑧	4
⑨	2
⑩	5
⑪	1
⑫	3
⑬	3
⑭	5
⑮	4
⑯	3
⑰	4
⑱	3
⑲	1
⑳	5
㉑	5
㉒	2
㉓	1
㉔	4
㉕	3
㉖	3
㉗	2
㉘	1
㉙	5
㉚	4
㉛	4
㉜	3